

いのちと地域を守る



【震災の経緯】体中自由な服を脱ぎ、乗せて避難しようとしたが、フロントが折れて走れなくなった。震の反響が、現在車の運転練習行い、ルールづくりを促している。



【震災の経緯】動産の価値は、福島の避難に安んずるし、働いた震災後、期間、利用費その家族の避難生活を送った。職は変じ、地元に戻ってきた。



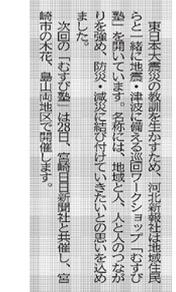
【震災の経緯】震災後、母子避難がつかないが、災害用伝言ダイヤルを使わずに避難して、避難先で避難生活を送った。避難先で避難生活を送った。



【後の経緯】被災後、津波が押し寄せ、避難所が溢れ、避難所を確保する必要がある。



【被災者の備え】津波を避けて避難する。津波を避けて避難する。



東日本大震災の経験を生かすため、河北福祉福祉推進員として、津波に備える。津波に備える。

ちり地震よぎり「油断」



50年前、目立った被害なし 高くくり逃げぬ人も

津波に襲われた地域の様子

東日本大震災の発生後、代々駒浜の住民の中には、過剰な人も、過剰な人も、津波に襲われた。津波に襲われた。

このころ、大津波が来た。津波が来た。津波が来た。

津波が来た。津波が来た。津波が来た。

津波が来た。津波が来た。津波が来た。

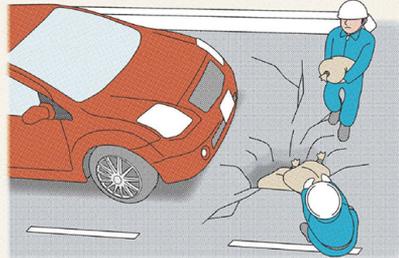
円滑な車避難を目指して



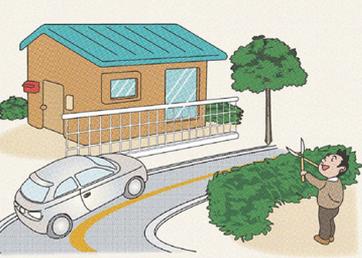
事前に車避難のルールを決めておく



夜間など条件を変えて避難訓練を実施する



道路の陥没・亀裂と浸水に備えて土のうを用意する



車の避難路を確保するためブロック塀を生け垣、ネットフェンスに替える

被災・復興支援機構理事長 木村 拓郎さん 車避難のルール 周知徹底を

東日本大震災では、徒歩での避難が基本だったが、津波の到達に間に合わなかったこと、高齢化が進むなどの課題が浮き彫りになり、車避難を考える必要性が高まっている。ただし、被災後は渋滞や、ブロック塀の倒壊、がれきの散乱により、車が進めなくなる事態が考えられる。事前に避難ルールを決め、訓練を重ねて周知徹底してほしい。車1台が立ち往生しただけでも混乱するため、避難路の確保が何にも増して重要だ。倒れたブロック塀などが道路をふさがないよう、主な道路だけでも生け垣やネットフェンスに変える対策が必要だろう。道路陥没や浸水の備えも大切。土のうを地区内に分散配備しておけば、応急的な道路補修に役立つ。車の搬れ違いが困難な狭い道では、一時待避場所を10~20mおきに設ける取り組みが有効になる。訓練は同じ内容の繰り返したとマニリ化する。夜間など条件を変えて実施してほしい。幅広い世代の参加を促す工夫も必要だ。夏休みに避難所体験や防災キャンプはどうだろう。大人と子どもが一緒にいて、電気やガスを使わずに炊き出しをするのもいい。訓練は同じ内容の繰り返したとマニリ化する。